



TITLE:

日本人骨盤内臓器ノ局所解剖學的研究

AUTHOR(S):

千葉, 忠恕

CITATION:

千葉, 忠恕. 日本人骨盤内臓器ノ局所解剖學的研究. 日本外科宝函 1928, 5(2): 243-262

ISSUE DATE:

1928-03-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/200121>

RIGHT:

日本人骨盤內臟器ノ局所解剖學的研究

The Examination About The Topographical Anatomy Of The Pelvic Viscera In Japanese.

By
Dr. C. CHIBA.

From the Anatomic Institute of the Kyoto Imperial University (Director: Prof. Dr. B. Adachi)

京都帝國大學醫學部解剖學教室(足立教授指導)

大學院學生 醫學士 千葉 忠 恕

序 論

第一章 直 腸

第一項 緒 言

第二項 S字狀腸々間膜ノ下部附着線ノ額面上ノ走向並ニ位置

第三項 直腸上界ノ骨盤後壁ニ對スル高サ

第四項 直腸ノ額面彎曲

第五項 直腸ノ薦骨部矢狀彎曲

第六項 直腸ノ長サ(附、初生兒ノS字狀腸ノ長サ)

第七項 S字狀腸ト直腸トノ界ニ於ケル狀態

第八項 直腸柱

第九項 直腸前後徑並ニ "Saccus" 及 "Anpula" ニ就テ

第十項 直腸橫皺襞

第十一項 直腸會陰部矢狀彎曲ノ走向

第十二項 肛門ノ位置

第二章 膀 胱

第一項 緒言並ニ研究方法

第二項 膀胱ノ形狀(附、外徑)

第五卷

【原 著】

千 葉

第三項 內尿道口、輸尿管開口部並ニ膀胱底後緣ノ內隅等ノ相互間ノ距離
第四項 膀胱各內壁ノ爲ス角度
第五項 膀胱長軸ノ方向
第六項 膀胱內徑(主トシテ虛盈ニヨル變動)
第七項 膀胱各壁ノ正中斷面ニ於ケル外圍ノ長サ及ビ全層ノ厚サ
第八項 膀胱ノ位置
一、內尿道口ノ位置
二、膀胱頂ノ位置

第三章 ドウグラス氏腔

第一項 ド氏腔底ノ骨盤ニ對スル位置
第二項 ド氏腔底ト肛門トノ直線距離
第三項 ド氏腔底ノ直腸ニ對スル位置の關係
第四項 ド氏腔ノ腹膜(附)直腸子宮皺襞
第五項 ド氏腔ノ廣サ並ニ深サ
第六項 ド氏腔底ノ後脛穹窿ニ對スル位置の關係
第七項 直腸膀胱窩底ノ攝護腺ニ對スル位置の關係
第八項 攝護腺ノ位置並ニ其他二三ノ事項ニ就テ

二四三

(第貳號)

八一)

第四章 膀胱子宮窩

第一項 窩底ノ骨盤ニ對スル位置の關係

第二項 窩底ノ子宮並ニ後腰窩ニ對スル位置の關係

第五章 內臍並ニ外臍皺襞

第一項 內臍皺襞

第二項 外臍皺襞

文獻 附圖說明並ニ附圖 (I)(II)(III)(IV)

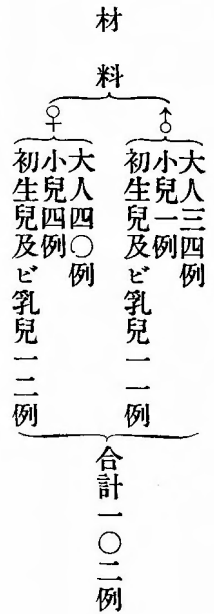
序 論

骨盤內臟器ノ局所解剖學的研究ニ關スル報告ハ文獻ノ數ニ於テハ決シテ尠シト云フベカラズ、然レドモ由來骨盤內臟器ノ如キ制限セラレタル骨盤腔內ニ於テ、虛盈常ナキ莢狀乃至囊狀ヲナセル臟器ニシテ、加フルニ腹腔內臟器ノ影響ガ活體ニ於テハ勿論、硬化屍ニ於テモ著シキモノニアリテハ、其ノ形狀位置並ニ相互關係ヲ極ムルニハ周到ノ注意ヲ以テ先ヅ個々ノ內臟ニ就テ種々ノ狀態一於ケルモノヨリ始メ、次ニ其ノ相互關係ニ及ボサル時ハ決シテソノ眞髓ニ觸ルベクモアラズ。而カモ多數ノ材料ヲ俟ツニアラズンバ到底之レヲ全フシ得ルモノニアラザルナリ。纏ツテ從來ノ歐洲人ニ就テノ研鑽ノ跡ヲ溫ヌルモ斯カル條件ニ添ヒタルモノハ極メテ寥寥タルノミ。夫ノ Waltherノ著書ノ如キモ亦概括的ノ記載ニ過ギズ。我ガ日本人ニ就テハ多年本敎室ニ於テ蒐集セル多數ノ女子硬化屍ニ就テ曩ニ石川氏ガ之レヲ調査セルモノアルノミ。惟フニ今後斯カル多數ノ材料ヲ得ル事ハ頗ル至難ノ事タルベク他面猶就テ研究スベキ餘地甚ダ多シトス。

仍テ予ハ同氏ノ材料ニ加フルニ猶、成人男子及ビ初生兒ヲ以テシ、主トシテ直腸並ニ膀胱ノ虛盈狀態ヲ參酌シ、是等ノ形狀、位置、相互關係、男女ノ比較、成人ト初生兒トノ比較等ヲ總ベテ之レヲ統計的ニ調査セリ。抑々本研究ハ軟部ノ人類學上ノ目的ニ出デタルモノナレドモ歐洲人ニ就テノ從來ノ研究ハ未ダ盡サルモノアルヲ、以テ之レヲ邦人トノ比較ニハ資シ難ク、從ツテ本報告ニ於テハ未ダ確實ナル人種の相異ヲ見ルコトハ少シト雖モ一般骨盤內臟器ノ解剖學上ノ見地ヨリスル時ハ其ノ補益スルコト尠ナカラズ。而シテ又臨床上ニ於テモ大ナル意義ヲ有スルモノナルヲ信ズ。

一、材料並ニ調査方法

材料ハ主トシテ骨盤正中斷(五—一〇%)「フォルマリン」、酒精硬化屍ヲ用ヒ、尙之レニ加フルニ正中斷ヲ施サルモノ乃至剔出セル骨盤內臟ノ硬化標本ヲ以テセリ。(附表(一)參照)



二、骨盤正中斷圖ノ描寫法及ビ調査方法

調査方法トシテハ骨盤正中斷面ニ雲母板ヲ載セテ各臟器ノ輪廓ヲ透寫シ、更ニ之レヲ紙面ニ描キ、之レト實測ヨリ得タル結果トヲ綜合シテ計測上ニ於ケル確實ト便宜トヲ得ント欲セリ。計測ハ凡テ直立位（兩側腸骨前上棘及ビ耻骨縫際前上縁ノ三點ヲ通ジタル面ヲ地平面ト直角ニ置キタル位置）ニ於ケルモノトス。而シテ骨盤傾度ヲ定ムルニハ左ノ方法ヲ案出シテ甚ダ其ノ容易ナル事ヲ知リタリ。即チ正中斷面ヲ上ニ向ケテ半側骨盤ヲ机上ニ平ニ安置シ、正確ニ矩形ヲナセル金屬框ニテ縁取レル大ナル雲母板ヲ載セ、其ノ上ニ更ニ他側ノ骨盤ヲ置キテ兩側骨盤ヲ充分ニ各斷面ニ於テ癒合セシム。次デ別ニ一枚ノ矩形ヲナセル硝子板ヲ取リテ兩側腸骨前上棘並ニ耻骨縫際前上縁ノ三點ニ密着セシムル如ク机上ニ鉛直ニ保持セシム。而シテ此ノ際硝子板面ハ同時ニ雲母板ノ一縁（ --- ）ニ接着セシムル如ク雲母板ノ位置ヲ定ムル時ニハ、該縁（ --- ）上ニ容易ニ左右腸骨前上棘ノ結合線ノ通過點即チ投影點ヲ印スル事ヲ得。茲ニ於テ上ニ載セタル半側骨盤ヲ靜カニ取去リ、其儘雲母板上ニ初メニ置キタル他ノ骨盤半側ノ正中斷面圖ヲ描キ終ルベシ。

然ル時ハ曩ニ印セル左右前上棘ノ投影點ヨリ耻骨縫際上縁ニ引ケル直線ハ直チニ直立位ニ於ケル鉛直線ナリ。而シテ又雲母板ノ一縁（ --- ）ト交ル他縁（ --- ）ハ直チニ地平面タリ得ベシ。尙此場合ニ於テ（ --- ）縁ヲナセル直線ハ其儘直立位ニ於ケル鉛直線タルベキナリ。從ツテ骨盤傾度ハ薦骨岬（初生兒ニテハ第一薦骨ノ上面ノ薦骨岬突角部ヲ以テス）ヨリ耻骨縫際上縁ニ引ケル直線ト地平面タルベキ一縁（ --- ）トナス角度ニ他ナラズ。（骨盤傾度ハ附表六ニアリ）
婦人及ビ初生兒ニ在リテハ耻骨縫際前上縁ト腸骨前上棘トノ皮下脂肪組織ノ厚サハ屢々著シク異ルヲ以テ斯カルモノ

ニ於テハ兩者ノ軟部組織ヲ骨ニ達スル迄切開ヲナシテ其ノ深サノ差丈ケ圖上ニ於テ耻骨縫際點ヲ後方ニ移動セシメタリ。斯クシテ該三點ヲ含ム平面ガ成ルベク直接骨面上ノ三點ヲ含ム平面ト平行ナラシムルノ注意ヲ加ヘタリ。(老人又ハ羸瘦セルモノニハ斯カル操作ヲ必要トセズ)斯クノ如クニシテ描キタル正中斷面圖ニテハ骨盤傾度並ニ兩側腸骨前上棘ノ結合線ト骨盤正中線ヲ通過スル矢狀面トノ交叉點ヲモ明カニスルコトヲ得ルモノトス。

三、研究事項

前記ノ如キ調査方法ヲ以テシタル正中斷面ニ於ケル骨盤内臓各部ノ圖上並ニ實測上ノ結果ニ、更ニ正中斷ニアラザル既述ノ如キ種々ノ材料ニヨルモノヲ追加シテ、成ル可ク多數ノ材料ヨリ得タル研究成績ヲ凡ソ次ノ各項ニ分チテ叙述スベシ。即チ(一)直腸、(二)膀胱、(三)ドウ格拉斯氏窩(直腸子宮窩並ニ直腸膀胱窩)(四)膀胱子宮窩、(五)内・外臍皺襞等之ナリ。

(備考)、各項ニ於ケル計測表ハ凡テ之ヲ當該項ニ附表トシテ一括シテ添加シタリ。

附 表 (一)

番號	屍體番號 (標本番號)	年 齡	性別	料料並ニ調査事項其他(*印ハ正中斷トス)
1	6057	13	♀	骨盤、ドウ格拉斯氏腔、直腸上界調査
2	6034	16	♀	* 一般的調査
3	4787	17	♀	* "
4	3659	21	♀	* "
5	4080	21	♀	* "
6	1741	24	♀	* " (但シ直腸額面彎曲調査ハ不可能トス)
7	462	24	♀	* "
8	6098	25	♀	* "
9	4870	26	♀	* " (但シ骨盤後壁ノ一部缺損ス)
10	1158	26	♀	* "
11	5753	28	♀	* "
12	2694	34	♀	骨盤内腔所見
13	17	35	♀	* 一般的所見
14	6023	35	♀	* "
15	3760	37	♀	* "

16	(622)	成人	♀	骨盤内腔所見(年齢不詳)
17	13	45	♀	〃
18	6041	45	♀	* 骨盤内臓ハ病的破壊ニ就キ骨盤調査ノミニ用フ
19	1369	47	♀	〃
20	4789	55	♀	* 一般の所見
21	6035	58	♀	骨盤内臓ハ炎症性癒着ノ爲メ骨盤調査ノミニ供ス
22	5771	59	♀	骨盤内臓所見
23	5954	66	♀	* 一般の所見
24	4780	69	♀	骨盤内臓ハ炎症性癒着ノ爲メ骨盤調査ノモノニ供ス
25	5982	78	♀	* 一般の調査
26	5959	82	♀	* 〃
27	5966	82	♀	* 〃
28	465	生後4日	♀	* 〃
29	29	44	♀	骨盤、膀胱内腔其他ノ調査
30	3866	64	♀	骨盤内腔所見
31	1488	1年8ヶ月	♀	* 一般の調査
32	(992)	小兒	♀	* 〃 (年齢不詳)
33	(753)	生後2ヶ月半	♀	骨盤内腔特ニ臍皺襞ノ所見
34	40	39	♀	膀胱ト子宮ト連絡セル内臓標本、膀胱内腔所見
35	30	49	♀	膀胱ト子宮ト連絡セル標本、子宮膀胱窩ノ所見
36	(978)	30	♀	〃
37	172	31	♀	〃
38	964	6	♀	〃
39	(2515)	6ヶ月胎兒	♀	骨盤内腔所見(身長300耗)
40	1019	49	♂	* 一般の所見
41	1660	54	♂	* 〃
42	5225	24	♂	* 〃
43	1742	63	♂	* 〃
44	1746	25	♂	* 〃
45	1767	36	♂	* 〃
46	2061	52	♂	* 〃
47	8	初生兒	♂	* 〃 (月齡不詳、軀幹長380耗、(即チ顙頂ヨリ尾間骨下端ニ至ル長サ) 臍帶(-))
48	3761	〃	♂	* 〃 (生後、6ヶ月、軀幹長380耗、身長500耗、臍帶(-))

49	不明	〃	♂	*	〃	(生後3日目, 軀幹長250耗, 臍帶(+))
50	4	〃	♂	*	〃	(生後4日目, 軀幹長320耗, 臍帶(+))
51	不明	〃	♂	*	〃	(生後6日目, 軀幹長340耗, 臍帶(+))
52	〃	〃	♂	*	〃	(生後1ヶ月, 軀幹長330耗, 臍帶(-))
53	4511	〃	♀	*	〃	(生後2ヶ月半, 軀幹長270耗, 臍帶(-))
54	3	〃	♀	*	〃	(月齡不詳, 軀幹長300耗, 身長470耗, 臍帶(+))
55	不明	〃	♀	*	〃	(月齡不詳, 軀幹長320耗, 臍帶有無不明)
56	〃	〃	♀	*	〃	(月齡不詳, 軀幹長320耗, 臍帶(-))
57	2846	〃	♂	*	〃	(10ヶ月胎兒, 軀幹長280耗, 臍帶(-))
58	2833	〃	♂	*	〃	(生後3ヶ月, 軀幹長370耗, 臍帶(-))
59	不明	〃	♀	*	〃	(10ヶ月胎兒, 軀幹長270耗, 臍帶(+))
60	1836	〃	♂	*	〃	(生後6ヶ月, 軀幹長330耗, 臍帶(-))
61	不明	〃	♀	*	〃	(10ヶ月胎兒, 軀幹長310耗, 身長470耗, 臍帶(+))
62	〃	〃	♀	*	〃	(10ヶ月胎兒, 軀幹長300耗, 臍帶(+))
63	〃	〃	♀	*	〃	(10ヶ月胎兒, 軀幹長280耗, 身長445耗, 臍帶(-))
64	11	〃	♀	*	〃	(生後6日目, 軀幹長300耗, 身重420耗, 臍帶(-))
65	2515	胎兒	♀	*	〃	(6ヶ月胎兒, 軀幹長160耗, 臍帶(+))直腸走向所見
66	4	44	♂			骨盤內腔所見, <u>ドウグラス氏腔</u> ノ位置, 臍皺襞所見)
67	57	7	♂		〃	
68	1776	初生兒	♂		〃	(生後3ヶ月, 軀幹長370耗, 臍帶(+))
69	366	50	♂			骨盤橫斷標本, 膀胱內膜所見, 臍皺襞所見
70	5203	47	♂			膀胱內腔, 臍皺襞, <u>ドウグラス氏腔底</u> ノ位置等
71	5142	21	♂		〃	
72	不明	中年者	♂			骨盤橫斷標本, 膀胱內腔, 臍皺襞所見
73	5149	43	♂			骨盤內腔所見, 臍皺襞, <u>ドウグラス氏腔底</u> 位置, 其他ノ所見
74	5787	20	♂			主トシテS字狀腸々間膜附着線下部走向ノ所見
75	5164	64	♂		〃	
76	2845	62	♀		〃	
77	3	24	♂		〃	
78	不明	成人	♂		〃	
79	5696	50	♂		〃	
80	689	25	♂		〃	
81	5213	41	♂			臍皺襞所見

82	5777	40	♂	肛門位置所見其他
83	4813	29	♀	"
84	6024	38	♂	"
85	3666	36	♀	"
86	5615	38	♂	"
87	6014	17	♂	"
88	6071	50	♂	"
89	6068	22	♂	"
90	5827	34	♀	"
91	6072	62	♀	"
92	5841	36	♂	" (臍皺襞所見)
93	4879	71	♀	"
94	6239	20	♀	直腸上界其他
95	4164	32	♂	"
96	4096	85	♀	"
97	6062	42	♂	"
98	1308	39	♂	直腸柱所見(内臓剔出標本)
99	1786	31	♂	"
100	7467	26	♂	直腸上界所見
101	7511	29	♂	"
102	7527	39	♂	"

第一章 直腸

第一項 緒言

直腸ニ關スル研究中最モ論議セラレタルハ實ニ横皺襞並ニ之レニ伴フ環狀筋束集團トス。

而シテ其ノ走行ニ關スル記載トシテハ只大略ノ經路ヲ指摘セルノミニシテ、未ダ彎曲程度及ビ其ノ彎曲部位、正中線ニ對スル偏位等ノ如キ額面上ニ於ケル位置ニ就テハ文献記録ニ乏シ。特ニ小兒及ビ初生兒ニ關スルモノハ僅少ノ例ヲ以テ結論的記載ヲ試メルガ如キ嫌アリ。又直腸ノ上界ヲ何レトナスベキカト云フニ昔ハ左側薦腸關節附近、小骨盤ノ入口、薦骨岬ノ高サ等頗ル漠然タル記載ヲ爲セルニ過ギズ。斯カル移動性ヲ有セル部分ニ對シテ以上ノ如キ境界ヲ以テスルコトノ不合理ナルコトハ先人モ既ニ認メシ處ニシテ、直腸トS字狀腸トノ境界目標ノ如キ

モ決シテ腸其ノ物ニ於テハ之ヲ見出スコト能ハズトモ云ハレタリ。往時ハ一般ニ直腸上界ヲ骨盤入口ノ部位トナセルガ近時ハ一般ニS字狀腸々間膜ノ終ル最下點ヲ以テ其ノ境トナスニ至レリ。從ツテ特ニMesorectumナル名稱ノ必要ハ之レヲ認メズ。予モ亦腸間膜ノ終ル點ヲ以テ直腸ノ上界トセリ。

第二項 S字狀腸々間膜下部附着線ノ額面上ノ走向並ニ位置

Mesocolon sigmoidaeum ノ下部 (incl. Mesorectum) ノ後腹壁ニ對スル附着線ノ額面上ニ於ケル走向並ニ骨盤正中線ニ對スル位置ハ次ノ如シ。(以下附表(二)參照)

一、分類型式

成人、小兒並ニ初生兒計三八例ニ就テ凡ソ左ノ五型ニ分ツコトヲ得。

I型 左側ヨリ斜ニ右下方ニ走り正中線上ニ達ス。

II型 左側ヨリ正中線ニ達シ其儘一定距離ノ間之レニ添フテ下ル。

III型 正中線ノ左側ニ於テ一定距離ヲ隔テ、下走ス。

IV型 左側ヨリ正中線ヲ越ヘテ右側ニ至リ、一定距離ノ間之レト平行ニ下走ス。

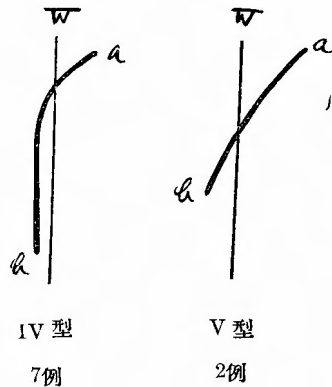
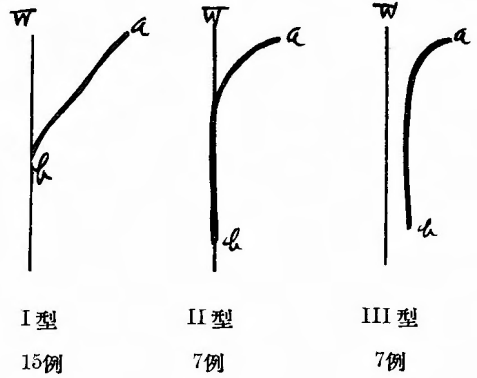
V型 左側ヨリ正中線ヲ越ヘテ斜ニ右下方ニ走り右側ニ終點ヲ有ス。

以上ノ内男女共I型ヲ最モ多數トス。(挿圖第一並ニ第一表參照)

第一表 (附表(二)參照)

成人			初生兒		成人 + 初生兒	
型	例	數	例	數	例	數
性別	女	男	女	男	女	男
I	2	7	3	3	5	10
II		4	1	2	1	6
III	2	1		4	2	5
IV	1	3	2	1	3	4
V		1	1		1	1
計	5例	16例	7例	10例	12例	26例

挿圖 (第一)



但シ、Wハ骨盤後壁ノ正中線
a—bハ腸間膜附着線ノ方向

二、骨盤後壁ニ對スル位置的關係

(イ) I型及ビV型ニ屬スルモノニシテ其ノ腸間膜附着線ガ正中線ト交叉スル高サハ成人ニテハ第二乃至第四薦骨ノ

第二號 (附表(二)參照)

(高サ)	成人(八例)	初生児(七例)	(備考)
IS	1例	(III, V)L	以下骨盤
(I, II)S	3例	P	後壁ノ高
III S	2例	(I, II)S	サニ於テ
(II, III)S	1例		Sハ薦骨
III S	1例		Lハ腰椎
			Pハ薦骨
			岬ヲ意味ス

間ニシテ、特ニ第二、第三薦骨間並ニ第三薦骨部位ヲ多シトス。(第二表參照)

(ロ) I型ハ成人ノ多數例(九例中八例)ニ於テハ薦骨岬ノ高サニテ正中線ニ近ヅクモノナルガ、其ノ部分ト第一薦骨椎體ノ左側椽トノ地平距離ハ計測シ得タル七例ニ在リテハ一五乃至三五耗ニシテ、内四例ニ在リテハ二〇乃至三五耗ヲ算ス。又I型中No.

T₅ ハ其ノ腸間膜附着線ガ甚ダシク下位ニ在リテ骨盤腔ニ下降スルニ際シ側壁ニ添フテ深ク小骨盤腔内ニ入り、後僅カニ上昇シテ第二、第三薦骨間ノ高サニテ正中線ニ近ヅキ、更ニ斜右方ニ向テ下降シ、第四薦骨前面ニ至リテ終ル。斯カル状態ヲ呈セルモノハ他ニナシ。

(ハ) II、III、IV 三型ニテ其ノ腸間膜附着線ガ正中線ニ近ヅキ(III型)、又ハ之ト交叉スル高サ(第三表参照)及ビ交叉後下走スル距離ヲ椎骨數ヲ以テスル時(第四表参照)ハ次表ノ如シ。

備考、腸間膜附着線ノ下界ノ高サハ直腸上界ノ高サニ當ルモノナレバ次項直腸上界ノ高サニ於テ別ニ述ベシ。何トナレバ該項ニ於ケル例數ハ本項ニ於ケルヨリモ其ノ調査シ得タルモノ多ケレバ該項ニ於ケルモノニ就テ述ブルヲ以テ一層有意義ト信ズルヲ以テナリ。

第三表 (附表(二)参照)

高サ

成人(III, V)L	1例	初生児(III, L)	1例
(II)P	9例	(III, V)L	4例
(I, I)S	1例	V, L	2例
		P	3例

P ハ薦骨岬ヲ意味ス
L ハ腰椎ヲ意味ス
S ハ薦骨ヲ意味ス

第四表 (附表(二)参照)

椎骨ノ數	成人(11例)	初生児(10例)
1個	3例	3例
1.5個	2例	2例
2個	4例	3例
2.5個	2例	2例

(ニ) III型ニテ腸間膜附着線ト正中線トノ距離ハ成人二例ニ就テ見ルニ、薦骨岬ノ高サニテハ第一薦骨椎體ノ外側椽ヲ去ルト左方へ一〇耗(No. 13)乃至五〇耗(No. 73)ノ點ヲ通過シ、其ノ下界ハ正中線ヨリモ左方へ一〇耗(No. 13)乃至二〇耗(No. 73)ノ處ニ終ル。(附表(二)参照)

附 表 (二)

検査材料番號	性別	年 齡	着線ノ下端チS字狀ノ高サ即	直腸ノ虚盈(但シ數)	字ハ直腸ノ内容積トス(坭)	S字狀腸ノ盈虚狀	少腹膜脂肪組織ノ多	S字狀腸々間膜附着線ノ下部走向線					ケ下ノ降スルカ
								額面ヨリセル分位置ニ	正サ中線ニ近ツク高	正高サ中線ト交又スル	第一ノ左側線トハハ地體	正中線ト交又スル(耗)	ハ之ノ交又シテ又後丈
1	♀	13	—	(-)收縮	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2	♀	16	(I. II) S	(++)	(-)	n	—	—	—	—	—	—	—
3	♀	17	III. S	(+)	(-)	a	—	—	—	—	—	—	—
4	♀	21	(I. III) S	(-)收縮	(-)	a	—	—	—	—	—	—	—
5	♀	21	II. S	(-)	(-)	a	—	—	—	—	—	—	—
6	♀	24	(I. II) S	(-)弛緩	—	n	—	—	—	—	—	—	—
7	♀	24	II. S	(+)	(-)	f	—	—	—	—	—	—	—
8	♀	25	III. S	(+)	(-)	—	(I)	P	—	—	35	—	—
9	♀	26	—	(+)弛緩	—	a	—	—	—	—	—	—	—
10	♀	26	(I. II) S	(-)	(-)	—	—	—	—	—	—	—	—
11	♀	28	P	(+++)(270)	(+++)	f	(II)	(III. V) L	—	—	—	—	1
12	♀	24	(I. III) S	(-)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13	♀	25	(II. III) S	(-)	(-)	—	(II)	P	—	—	20(10)	—	2
14	♀	35	III. S	(++)	(-)	—	(III)	—	P	—	—	—	2½
15	♀	37	II. S	(+)	(-)	—	—	—	—	—	—	—	—
16	♀	成人	III. S	(-)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
17	♀	45	(II. III) S	(++)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
19	♀	47	(II. III) S	(-)收縮	—	f	—	—	—	—	—	—	—
20	♀	55	I S	(+++)(200)	(+++)	n	—	—	—	—	—	—	—
21	♀	58	III. S	(-)	(-)	n	—	—	—	—	—	—	—
22	♀	59	(III. III) S	(-)收縮	(+++)	f	—	—	—	—	—	—	—
23	♀	66	—	(-)下部盈	(-)	n	—	—	—	—	—	—	—
24	♀	69	—	(+++)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
25	♀	78	III. S	(-)	(-)	(-)	—	—	—	—	—	—	—
26	♀	82	(II. III) S	(+++) ^{上・虚} _{下・盈(140)}	(-)	n	—	—	—	—	—	—	—
27	♀	82	(II. III) S	(+++) ^{上・虚} ₍₉₀₎	(-)	a	—	—	—	—	—	—	—
29	♀	44	P	(+++)	(+++)	a	—	—	—	—	—	—	—

30	♀	64	(Ⅱ・Ⅲ)S	(-)	-	-	-	-	-	-	-
76	♀	62	-	-	-	-	(Ⅰ)	P	-	15	-
40	♂	49	V.L	(Ⅲ)(200)	(Ⅲ)	n	-	-	-	-	-
41	♂	54	(Ⅲ・Ⅲ)S	(-)收縮	(-)	f	(Ⅰ)	P	-	30	-
42	♂	24	(Ⅰ・Ⅱ)S	(+)	(-)	a	(Ⅲ)	-	P	-	1
43	♂	63	(Ⅱ・Ⅲ)S	(-)	(-)	a	(Ⅲ)	-	P	-	2
44	♂	25	(Ⅱ・Ⅲ)S	(-)	(-)	a	(Ⅱ)	-	(Ⅰ・Ⅱ)S	-	1
45	♂	36	(Ⅱ・Ⅲ)S	(-)	(-)	-	(Ⅴ)	-	Ⅰ・S	-	-
46	♂	52	(Ⅰ・Ⅱ)S	(-)下・盈	(-)	-	-	-	-	-	-
70	♂	47	-	(Ⅲ)	(-)	-	(Ⅰ)	P	-	15	-
71	♂	21	(Ⅱ・Ⅲ)S	(++)	-	-	(Ⅰ)	P	-	20	-
73	♂	43	Ⅱ・S	(+)	(-)	-	(Ⅲ)	P	-	50(20)	1½
74	♂	20	Ⅲ・S	(-)收縮	(-)	-	(Ⅱ)	-	P	-	2½
75	♂	64	Ⅲ・S	(-)	(-)	-	(Ⅱ)	(Ⅰ・Ⅲ)S	-	35	-
77	♂	24	(Ⅲ・Ⅲ)S	-	-	-	(Ⅰ)	P	-	15	-
78	♂	成人	Ⅱ・S	-	(-)	-	(Ⅱ)	-	P	-	1½
79	♂	50	(Ⅱ・Ⅲ)S	(+)	(-)	-	(Ⅲ)	-	P	-	2
80	♂	25	(Ⅱ・Ⅲ)S	(Ⅲ)	(-)	-	(Ⅱ)	-	P	-	2
81	♂	41	-	(++)	-	-	-	-	-	-	-
82	♂	40	-	(-)收縮	-	-	-	-	-	-	-
100	♂	26	(Ⅱ・Ⅲ)S	-	-	-	(Ⅰ)	P̄	-	30	-
101	♂	29	Ⅲ・S	-	-	-	(Ⅰ)	P	-	-	-
102	♂	39	Ⅱ・S	(+)	-	-	-	-	-	-	-
(以上成人)											
31	♀	1年8ヶ月	(Ⅰ・Ⅱ)S	(++)	(-)	-	-	-	-	-	-
32	♀	小兒	Ⅰ・S	(-)	(-)	-	-	-	-	-	-
67	♂	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
(以上小兒)											
28	♀	初生兒	P	(-)	(Ⅲ)	-	-	-	-	-	-
53	♀	同	P	(Ⅲ)	(Ⅲ)	-	(Ⅲ)	-	Ⅲ・L	-	1½
54	♀	同	P	(+)	(+)	-	(Ⅱ)	-	(Ⅲ・Ⅴ)L	-	1
55	♀	同	P	(+)	(Ⅲ)	-	(Ⅰ)	Ⅲ・L	-	-	-
56	♀	同	P	(-)	(Ⅲ)	-	(Ⅰ)	Ⅲ・L	-	-	-

59	♀	同	(Ⅲ・Ⅴ)L	(Ⅲ)	(Ⅲ)	—	(Ⅴ)	—	Ⅲ・L	—	—
61	♀	同	P	(—)	(—)	—	—	—	—	—	—
63	♀	同	Ⅲ・S	(—)	(—)	—	(Ⅲ)	—	P	—	2½
64	♀	同	P	(+)	(—)	—	(Ⅱ)	(Ⅲ・Ⅲ)L	—	—	—
47	♂	同	I・ⅡS	(+)	(—)	—	(Ⅲ)	(Ⅲ・Ⅴ)L	—	—	2
48	♂	同	(Ⅱ・Ⅲ)S	(+)	(—)	—	(Ⅱ)	—	P	—	2
49	♂	同	P	(Ⅲ)	(Ⅲ)	—	(Ⅰ)	—	—	—	—
50	♂	同	P	(+)	(Ⅲ)	—	(Ⅲ)	(Ⅲ・Ⅴ)L	—	—	—
51	♂	同	P	(Ⅲ)	(Ⅲ)	—	(Ⅲ)	(Ⅲ・Ⅴ)L	—	—	—
52	♂	同	P	(—)	(—)	—	(Ⅰ)	—	—	—	—
57	♂	同	(Ⅰ・Ⅱ)S	(—)	(—)	—	(Ⅲ)	—	V・L	—	1½
58	♂	同	Ⅱ・ⅢS	(—)	(—)	—	(Ⅰ)	P	—	—	—
60	♂	同	(Ⅱ・Ⅲ)S	(—)	(—)	—	(Ⅱ)	—	P	—	2
62	♂	同	(Ⅱ・Ⅲ)S	(—)	(—)	—	(Ⅲ)	V・L	—	—	2½

(以上初生兒)

備考：(虚盈) { (—)ハ虚, (+)ハ稍盈, (++)ハ中等度盈
(直腸上界ノ高サ) { (Ⅲ)ハ盈ヲ意味ス
骨盤骨ノ高サニテSハ薦骨, Lハ腰椎, Pハ薦骨岬ヲ意味ス。故ニI・Sハ第一薦骨ヲ示シ(I・Ⅱ)Sハ第一第二薦骨間ヲ意味ス

(皮下脂肪組織ノ多少) { aハ僅少(瘦)
bハ多量(肥)
nハ尋常ヲ示ス

備考：No. 13, 73, =テ(10), (20)
トアルハ下界ノ正中線トノ距離ナリ。(但シ薦骨岬ノ高サニテハ其ノ椎體ノ側縁ヨリノ距離ヲ以テセリ)

第三項 直腸上界ノ骨盤後壁ニ對スル高サ

一、直腸上界ノ高サハ成人四二例ニ於テハ第五腰椎乃至第四薦骨ノ間ニ亘リ、男女共其ノ最も多クノ例ニ於テ第二、第三薦骨間ナルヲ認ム(第五表参照)。小兒二例ニテハ第一薦骨及ビ第一、第二薦骨間ナルヲ認ム(附表第三参照)。初生兒一九例ニ於テハ薦骨岬ヲ最も多シトス(第六表参照)。故ニ初生兒ニ在リテハ成人ニ於ケルヨリモ遙カニ高シト云フベシ。(本項ハ附表(二)参照)

第五表 (附表(二)参照)

高サ	成人(例數)		計
	男	女	
V・L	1	0	1
P	0	2	2
I・S	0	1	1
I・ⅡS	2	3	5
Ⅱ・S	3	3	6
(Ⅱ・Ⅲ)S	8	7	15
Ⅲ・S	2	6	8
(Ⅲ・Ⅳ)S	1	2	3
Ⅳ・S	1	0	1
計	18	24	42

第六表 (附表(二)参照)

高サ	初生兒(例數)	
	男	女
(Ⅲ・Ⅴ)L	0	1
P	4	7
(Ⅰ・Ⅱ)S	2	0
(Ⅰ・Ⅲ)S	4	0
Ⅲ・S	0	1
計	10	9

歐人ニ於テハ Mesometum ヲ認メザル多クノ學者(Merkel, Waldeyer, Testut, Joun-
esco) (in Poirier), (Cunningham, v. Samson) ニヨレバ成人ニ在リテハ第三薦骨ノ高サ
ヲ以テ直腸上界ノ高サトセリ。

サレバ邦人ト歐人トノ間ニ殆ンド大差ナキニ似タリト云フベシ。只邦人ハ歐人ヨリ
モ其ノ直腸上界ガ稍々上位ニ在リト云フベキノミ。初生兒並ニ小兒ニ關シテハ v. Sam-
son ノ S 字狀腸々間膜ノ附着線走向ニ就テノ記載ヲ見ルノミナルガ、彼ニヨレバ其ノ
下界(直腸上界ニ當ル部)ハ二三例ノ初生兒乃至乳兒(半歲迄)中、薦骨岬ノ前面中央或

ハ稍々其ノ左側ニアルモノ最モ多クシテ、直腸虛ナルモノニハ第三薦骨、其ノ盈ナルモノニハ薦骨岬以上ニ達スルモノヲ
認メ、小兒(二歲乃至二歲半)三例ニ於テハ第三薦骨孔ノ高サニ在ルヲ認メ、八歲小兒一例ニ於テハソレヨリ稍々下方ニ在
ルヲ認メタリト云ヘリ。之レヲ邦人ニ於ケルモノト比較スルニ尠
クトモ初生兒ニテモ殆ンド大差ナシト云フコトヲ得。

二、年齡的關係ヲ見ルニ第七表ニ示ス如ク高齢者ニハ低位ノモ
ノ多ク壯者ニテハ一般ニ高位ニアリ。(但シ直腸著シク膨滿セル
例ヲ除ク)

第七表 (附表(二)参照)

高サ	39歳以下 (例數)	(40-60)歳 (例數)	(61-82)歳 (例數)
V.L		1*	
P	1*	1*	
I.S		1*	
(Ⅰ・Ⅱ)S	4		1*
Ⅱ・S	5	1	
(Ⅰ・Ⅲ)S	9	4	3{1.+2*
Ⅲ・S	6	1	1
(Ⅱ・Ⅲ)S		1	1
Ⅲ・S			1
計	25例	10例	7例

* ハ直腸虛ナルモノトス

W. Vogt ハ一〇例ノ老人屍體ヲ調査シテ、S 字狀腸々間膜ノ附
着線ノ爲ス Hafwinkel ノ頂點ハ薦骨岬以下ニアルカ乃至ハ殆ン
ド斯カル屈曲部ヲ形成スルコトナクシテ直チニ骨盤内ニ下降スル
ヲ認メ、之レヲ普通壯者ニ見ル該頂點ノ位置(第四乃至第五腰椎
ノ高サ)ニ比シテ甚ダシク低キハ、他ノ内臓下垂ト共ニ老齡ニヨ

ル腹膜弛緩ト同一原因ニヨルモノナリト云ヘリ。予ノ直腸上界ニ關スル所見モ亦之レト其ノ因テ來ル處ヲ同ジクスルモノト云フベキナリ。

三、直腸ノ虛盈トノ關係ニ就テ見ルニ、成人ニ在リテハ低位ノモノハ直腸虛狀態ノモノニ多ク、高位ノモノガ其ノ盈狀態ノモノニ多シ。(第八表參照)尙表中直腸盈狀態ノモノニシテ第三、第四薦骨間ニアル一例(No. 27)ハ直腸上部ガ虛ニシテ下部ノミガ盈ナルモノニテ直腸全部ニ亘リテ盈狀態ヲ呈セザルモノナリ。且ツ又本例ハ老齡(八十二歲)ニシテ年齡的關係ヨリセバ低位ニアルベキモノトス。又第五腰椎乃至第一薦骨ノ高サニアル四例中三例ハ本來年齡的ニハ低位ニアルベキナルニモ拘ラズ斯ク高位ニアルハ全ク直腸膨滿ノ結果ニ他ナラズ。初生兒ニ於テモ亦成人ト同ジク直腸盈時ニ高位ノモノ多キガ如シ(第九表參照)直腸ノ上昇ガ其ノ虛盈ニ關係ヲ有スル事實ハ Albert (zit. nach Samson), Bardenheben モ既ニ記載スル處トス。

第八表 (附表(二)參照)

高サ	内容	虛 (例數)	中等度盈 稍盈	盈
	V.L			1
	P			2
	I.S			1
	(I.II)S	4	1	
	II.S	1	4	
	II.III)S	8	3	2
	III.S	4	3	
	(III.III)S	2		1
	III.S	1		
	計	20	11	7

第九表 (附表(二)參照)

高サ	内容	虛 (例數)	中等度盈 稍盈 (例數)	盈 (例數)
	(III.V)L			1
	P	4	4	3
	(I.II)S	1	1	
	(II.III)S	3	1	
	III.S	1		
	計	9	6	4

第十表 (附表(二)參照)

高サ	尋常 (例數)	肥滿 (例數)	瘦 (例數)
V.L	1		
P	1	1	
I.S	1		
(I.II)S	2		1
II.S		1	1
(II.III)S	1	1	3
III.S	2		1
(III.III)S		2	1
計	8	5	7

四、皮下脂肪組織ノ多少トノ關係ニ於テハ成人ニ在リテハ特別ナル點ヲ見出ス能ハズ。(第十表參照)

附 表 (三)

直腸額面 土ノ彎曲 型		A 型	B 型
彎曲數		各彎曲ノ強弱……………No. (但シ*印ハ 初生兒)	各彎曲ノ強弱……………No. (但シ*印ハ 初生兒)
三 彎 曲		I II (強) } …………… { No. 31(♀小兒)	I (強) II (強) } …………… { No. 44(♂25歲) III (弱) } …………… { No. 52(♂*)
		I (強) II (強) } …………… { No. 63(♀*)	I (弱) II (弱) } …………… { No. 48(♂*)
		I (強) II (強) } …………… { No. 40(♂49歲) No. 62(♂*)	I (弱) II (弱) } …………… { No. 9(♀26歲)
二 彎 曲	著	I (強) II (強) } …………… { No. 43(♂63歲) No. 57(♂*) No. 61(♀*)	
		I (弱) II (弱) } …………… { No. 45(♂36歲)	
		I (強) II (弱) } …………… { No. 4(♀21歲) No. 26(♀82歲)	
	明	I (弱) II (弱) } …………… { No. 13(♀35歲)	
		I (強) II (甚々弱) } …………… { No. 8(♀25歲) No. 14(♀35歲) No. 15(♀37歲) No. 27(♀82歲) No. 23(♀66歲)	I (甚々弱) } …………… { No. 41(♂54歲) No. 60(♂*)
		I (甚々弱) II (甚々弱) } …………… { No. 2(♀16歲) No. 3(♀17歲) No. 10(♀26歲) No. 25(♀78歲) No. 5(♀21歲) No. 32(♀小兒)	
一 彎 曲	不 著 明	I (強) …………… { No. 7(♀24歲) No. 42(♂24歲) No. 46(♂52歲) No. 55(♀*) No. 58(♂*)	I (強) …………… { No. 11(♀28歲) No. 20(♀55歲)
		I …………… { No. 56(♀*)	I …………… { No. 28(♀*) No. 47(♂*) No. 50(♂*)
無 彎 曲		No. 49(♂*) No. 59(♀*)	I (弱) …………… { No. 51(♂*)
		No. 53(♀*) No. 64(♀*)	No. 54(♀*)

第四項 直腸ノ額面彎曲

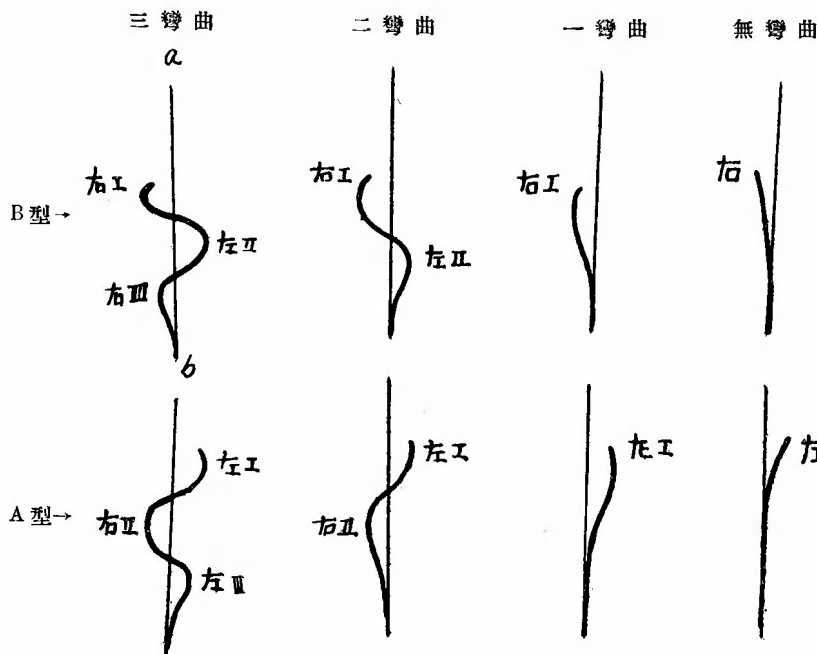
一、直腸ノ額面彎曲圖作製ニ就テ

直腸ノ額面上ニ於ケル彎曲ヲ直接ニ知ルコトハ予ノ材料ニテハ不適當ナレドモ、此ノ骨盤正中斷面ヨリ直腸橫徑並ニ直腸各部ノ額面上ノ偏位等ヲ測定スル時ハ間接ニ直腸彎曲狀態ヲ知ルコト難シトセズ。此ノ目的ヲ以テ予ハ直腸ノ投影圖ヲ描カンガ爲メ骨盤正中斷面圖ニ於テ其ノ垂直線(直立位)即チ骨盤正中線ニ直角ヲナセル多數ノ橫線ヲ引キタルモノヲ傍ラニ置キテ、此ノ圖上ニ描ケル橫線ト同一位置ニ在ルガ如クニ屍體ノ骨盤正中斷面ニ多數ノ糸ヲ引ツ張リテ之レヲ固定シ、各糸ノ直腸斷面ヲ通過スルニ當リ其ノ中點(直腸內腔斷面)ノ高サニ於ケル左右ノ直腸橫徑(壁ノ厚サヲモ加ヘタル)乃至偏位度(正中線ヨリ直腸外壁ニ達スル迄ノ距離)ヲ實測シ、以テ得タル數ハ之レヲ一々曩ノ投影圖ニ引ケル橫線上ノ之レニ該當セル點ニ於テ印ヲ附シテ漸次直腸ノ全徑路ヲ描出セリ。此クノ如クニシテ得タル圖ハ實ニ骨盤ヲ身體ノ直立位ニ置キテ、之レニ直角方向ナル正面ヨリ見たル直腸額面彎曲ノ經路ヲ示セル投影圖ナリ。但シ本投影圖ニ在リテハ矢狀彎曲ヲナセル直腸全經路ヲ前面ヨリ見たルモノナレバ、此ノ圖ニヨリテ直腸走向ノ有スル傾斜ノ緩急乃至長サ等ヲ知ルコトハ不可能ナレドモ、吾人ガ知ラント欲スル處ノ額面上ニ於ケル彎曲ノ狀態、彎曲回數、正中線ニ對スル偏位程度及ビ其ノ骨盤後壁ニ對スル位置的關係等ヲ見ルニハ何等ノ支障ヲモ來スモノニ非ズ。然レドモ直腸矢狀彎曲ノ甚ダシク強度ノモノニアリテハ、殊ニ其ノ上部ニ於テ前記ノ方向ヨリシテハ殆ンド其ノ投影圖ヲ描キ難キヲ以テ、其ノ部分丈ハ圖解ヲ容易ナラシメンガ爲メニ、便宜上寫生圖トシテ附加セリ。(但シ此ノ場合ニ於テハ其ノ部分ノ直腸圖ノ輪畫線ヲ他ノ部ヨリモ細クセリ)。(以上附圖第I參照)(本項ハ附表(二)參照)

二、直腸ノ額面彎曲ノ種類(型)

前段ニ述ベタル如クニシテ作製セル直腸ノ額面上ニ於ケル彎曲投射圖ヨリ直腸額面彎曲ノ種類ヲ左圖(挿圖(二)參照)ノ如キ諸型ニ分類スルコトヲ得。即チ直腸上部乃至上部彎曲部ガ正中線ニ對スル位置ニ就テ見ル時ハ之レヲ(A)、(B)二型ニ

挿 圖 (二)



備考: I, II, III等ハ彎曲ヲ上ヨリ數ヘタル順位トス.

a-bハ骨盤後壁正中線ヲ示ス.

大別スベク、額面彎曲ノ數ニ就テ見ル時ハ之レヲ三彎曲、二彎曲、一彎曲及無彎曲ノ四型ニ細別スベシ。但シ(A)型トハ直腸上部乃至上部彎曲部ガ正中線ノ左方ニ位セルモノヲ云ヒ、(B)型トハ之レニ反シ、ソレガ正中線ノ右方ニ位セルモノヲ云フ。而シテ各彎曲ニハ強弱種々ノ狀態ノモノアルヲ認ム。(附表(四)參照)

(イ) 何レノ型ガ多キカト云フニ成人、小兒、初生兒合計四五例ニ就テ見ルニ何レモ(A)型ハ(B)型ヨリモ多シ。成人ニハ二彎曲最モ多ク(二四例中一八例)、次デ一彎曲ヲ多シトス(二四例中五例)。初生兒ニテハ一彎曲最モ多ク(一九例中七例)、之レニ次デ二彎曲並ニ無彎曲ヲ多シトス(何レモ一九例中各五例宛)。之レヲ以テ見ル時ハ成人及小兒ニ於テハ無彎曲ノモノハ一例ヲモ認メザルニ初生兒ニ無彎曲比較的多ク存在スルコトハ初生兒ガ成人及ビ小兒ト異ナル點トス。三彎曲ハ甚ダ稀ニシテ成人、小兒、初生兒ニ各一例ヲ見ルノミナリ。(第十一表參照)

文献ニ徴スルニ、直腸ノ額面彎曲ニ關シテハ其ノ彎曲數乃至正中線ノ對スル位置等ニ就テ種々ノ記載ヲ見

第十一表 (附表(三)参照)

彎曲型	成人		小兒	初生兒		計
	A	B	A	A	B	
三彎曲	0	1	1	0	1	3
二彎曲	著明	6	1	0	1	25
	不著明	10	1	0	1	
一彎曲	3	2	0	3	4	12
無彎曲	0	0	0	4	1	5
例數計	19	5	2	11	8	45

彎曲ニシテ上及ビ下ノ彎曲ハ其ノ凹面ヲ左方ニ向ケ、中央ノ彎曲ハ著明ニシテ其ノ凹面ヲ右方ニ向クルモノトス。然シ又屢々之ト對側のニシテ上及ビ下ノ彎曲ガ其ノ凹面ヲ右方ニ向ケ、中央ノ彎曲ハ其ノ凹面ヲ左方ニ向クルモノアリ」ト。又 Rauber-Kopsch (一九〇七年版成書) 曰ク「直腸上界ハ薦骨ノ左方ニ突出シ其ノ下部ハ肛門ノ稍々上部ニテ右方ニ突出ス」ト。而シテ我が國ニ於ケル解剖講本ニハ直腸三彎曲說ヲ引用セルモノ多シ。以上諸家ノ述ベシ處ヲ予ノ分類型ニ比較スルニ Kohlrausch 及 Mesorectum ヲ是認セルヲ以テ彼ノ云ヘル彎曲型ニ於テハ其ノ直腸上部ハ Colon pelvium (nach Jannet) ニ相當スベシ。故ニ之レハ予ノ(A)型二彎曲ニ類似セリト云フベキナリ Rauber-Kopsch ノ唱ヘシモノハ予ノ(B)型二彎曲ニ匹敵ス。而シテ Cunningham ノ記載セル如キ三彎曲ヲ形成セルモノハ予ノ例ニテハ極メテ稀ナルコト前述ノ如シ。

レドモ、未ダ詳細ナル調査ヲ遂ゲタルモノナシ。且ツ是等ノ記載ハ直腸上界ノ定義區々ニシテ爲メニ本來同一型ナルベキモノニシテ然モ其ノ彎曲ヲ別様ニ記載セルガ如キモノヲ見ル。即チ直腸上界トシテS字狀腸々間膜ノ終ル處ヲ以テセルモノト、骨盤入口乃至薦骨岬ノ部位ヲ以テセルモノトアルガ如シ。前者ニヨレル Kohlrausch (1854) ノ記載ヲ見ルニ「直腸ハ薦骨岬ノ左側ヨリ弱彎曲ヲ作リテ正中線ニ達シ、若シクハ之ヲ越ヘテ右側ニ第一彎曲(突出ヲ右方ニ向クル)ヲ形成シ、再ビ正中線ニ戻リテ左側ニ第二彎曲(突出ヲ左方ニ向ケ)ヲ形成シ、其儘第二尾閭骨附近迄下降シテ以下正中線ニ添ヒテ肛門ニ至ル」トセリ。 Pardeleben (1888) ノ如キモ此ノ說ヲ是認セル一人ナルガ、尙彼ハ「直腸ノ上方ハ右方突出ヲナシ、中央ハ左方突出ヲナス」ト附言セリ。直腸上界ヲ第三薦骨部ノ高サヲ以テシ所謂 Mesorectum ナルモノヲ非認セル學者ノ記載ヲ見ルニ Cunningham (1915) 曰ク「直腸ノ額面彎曲ハ普通三

只爰ニ附記スベキコトハ予ガ稱スル額面彎曲ナルモノハ直腸外形ヨリ見タル處ニシテ決シテ其ノ內腔ニ於ケル經路ヨリ見タルモノニ非ザル點トス。即チ No. 11, No. 20 ノ如キ直腸カ強盈狀態ニアルモノニテハ、其ノ內腔經路ハ著明ナル横皺襞ニヨリテ明カニ三彎曲ヲ形成スレドモ其ノ外形ハ殆ンド大部分ニ於テ眞直グニシテ只上部ニ僅カニ弱キ彎曲ヲ形成セルノミナリ。Cumineum ガ直腸ハ盈時ニ於テ彎曲ハ却ツテ著明ナリト云ヘル處ヨリ推定スル時ハ、彼ノ云フ處ノ額面彎曲ハ其ノ內腔經路ヨリ見タルモノニアラザルヤ疑ナキ能ハズ。若シ然リトセバ彼ノ云ヘル處ハ予ト其ノ見解ヲ異ニスルモノト云フベク、從ツテ之レヲ予ノ例ト比較スルコトハ困難ナリ。之レヲ要スルニ予ノ例ニ於テ最も多ク見ル(成人)處ノモノハ Kohlrausch ノ云ヘル型ニ類似セリト云フベク、邦人ト歐人トノ間ニハ大差ナシト云フコトヲ得。

初生兒及ビ小兒ニ關スル記錄ハ甚ダ乏シク且ツ其ノ例數モ極メテ少シ。Kohlrausch ニヨレバ初生兒ノ直腸ニテハ上部ニ於テ左方ニ正中線ヲ越ユルヲ見タリト云ヒ、Pantleben ニヨレバ小兒ニ於テハ上部突曲ヲ右方ニ向クト云ヒ、Zuckerkandi (1890) ニヨレバ十ヶ月胎兒並ニ初生兒ノ直腸ハ眞直グニシテ彎曲ヲ缺如シ、六ヶ月胎兒(女)ニテモ其レガ眞直グニシテ、六ヶ月胎兒(男)ニテハ會陰部彎曲ヲ痕跡的ニ形成セルヲ認メタリト云ヘリ。又 Waidyer (1899) ニヨレバ初生兒及ビ小兒ニ於テハ其ノ矢狀彎曲弱クシテ直腸膨大部(Ampulla)ノ形成モ著シカラズト云ヒ、Disse (1892) ニヨレバ初生兒ノ初期ノモノニテハ直腸ハ眞直グニシテ、只僅カニ前方ニ向ツテ凹曲ヲ示スノミナリト云ヘリ。斯ク初生兒及ビ小兒ニ就テハ種々ノ記載アレドモ多クハ少數例ニヨルモノニシテ、且ツ Mesorectum ヲ非認セル近世諸學者ノ述ブル處ハ殆ンド直腸ハ眞直グナリト云フニ在リ。之レヲ予ノ調査結果トハ大ニ其ノ趣ヲ異ニセリト云フベク、予ハ爰ニ至リテ初生兒ト雖モ直腸ハ無彎曲ノモノ、ミニアラズシテ、成人ノ如ク二彎曲乃至一彎曲ヲ明カニ形成セルモノ尠ナカラザルモノナルコトヲ高調セント欲ス。蓋シ歐人記載ト異ルハ其ノ人種的差異ニアラズシテ歐人調査ノ未ダ到ラザルニヨルナランカ。(續)